

### 「A/R CDM & REDD+人材育成海外研修」に参加して

国際緑化推進センター（JIFPRO）主催の表記研修が、昨年11月12日～15日にかけて、ミャンマー国にて実施され、それに参加した一人として、感想を述べさせていただきます。

研修はヤンゴン市郊外の林業研修施設で行われました。日本からは講師3名、日本人研修生10名、ミャンマーからは全国の森林関係者、学生・研究者、企業・NGO関係者の32名が参加しました。研修内容はミャンマー国の林業事情、CDMとREDD+の基本ルールとコンセプト、ベトナムのCDMプロジェクト紹介、森林の測樹実習と二酸化炭素ストックの評価、チーク樹の伐倒調査によるバイオマス量測定実習、ミャンマー国における持続的森林管理及びREDD活動についてのグループ討議と発表等で、今後の私たちのNGO活動にも生かせるものだと確信して参加しました。

研修に対する私の第一印象は、最初に募集要項を見た時、日本人参加者は現地集合、現地解散と言う大胆な研修であったことです。集合場所ヤンゴン市のホテルへの交通手段も講師を含め日本人13名が8通りのも手手段を利用して、それぞれがまちまちの時間に到着しました。研修前日に集合の約束でしたが、ホテルに全員が揃ったのは、日付が変わった真夜中でした。

11月12日午前6:30に宿舎を立ち8:10研修所着。開講会式は8:30定刻に開始されました。開講式にミャンマー国環境省の副大臣が列席、これにはJIFPROの講師陣も感動と驚きを持って歓迎していました。環境問題に取り組もうとする国の姿勢と評価されていました。確かに、ミャンマー側の研修生たちの多くは各地方で森林関係に携わるエリートたちと感じました。

講座の中ではA/R CDMとREDD+の概念と方向性、ミャンマーの森林保全の現状などがレポートされ、全体像を理解した上で、根幹にかかわるカーボンストックの定量的測定と評価の方法が現地実習とセットで行われました。距離、樹高等を自動で測定できる便利な器具が紹介されると、ミャンマーの

研修生は奪い合うように、その扱いに慣れようと目を輝かせて実習に励みます。何かを得ようとする彼らの姿勢は、私にとっても大きな刺激になりました。日本からの参加者も意欲的で語学力も高く、講座の中でも質問、意見が積極的にかわされ、常に前向きでした。語学力の乏しい私はついていくのに四苦八苦でした。

実習は30年生強のチーク林のカーボンストック量の測定ということになりますが、初日は直径・樹高計測による測定値をもとにカーボンストック量の推定計算、2日目はサンプル木を伐採してバイオマス量の実測をしました。私が、唯一満足できたのは、伐倒調査における木の扱いでした。電動鋸が用を足さず、すべて人力によるサンプル木の伐採と幹枝の整理でした。日常の実践が役に立って大いに面目を保ちました。しかし計測、野帳の記入、計算は彼らに任せました。結果、測定データと計算結果をコピーするのを忘れたのは老化現象の進行の故と弁明しています。

炭素ストックの測定はクレジット評価の対象として、A/R CDMやREDDでは重要ですが、私たちN・GKS（NGO緑の協力隊関西澤井隊）の植林プロジェクトではクレジットを対象にはしていません。単に自然環境を守り、子供たちに望ましい将来を残そうと考えています。澤井代表の提唱される「ささやかな取組み、代償を求めず、ボランティア活動に徹した植林」の意義と重要性を一方において実感しながら研修を受けてきました。そして自己満足の領域かもしれませんが、私たちの研究部の取り組みとして、これまでにN・GKSの実践した林を定量的にも評価して記録として残したいと考えています。

最後に、地球温暖化緩和に関わる国際的な取組における国間の綱引きよりも、発展途上国であってもミャンマーの研修生たちの学ぼうという意欲により強い親しみを感じました。

（NGO緑の協力隊関西澤井隊 達富弘之）